家族を買った日―サンプル―

『ところざわつばき、六さいです。しょうらいのゆめは、りっぱな大人になって、お父さまのあとをつぐことです。えいごと、ふらんすごと、ちゅうごくごの、べんきょうをがんばります』

椿が頭を下げると、会場内に盛大な拍手が沸き起こった。何度も何度も練習した言葉。失敗せずに言えたことにほっと表情を緩めると、数え切れないほどのいちごがのった誕生日ケーキがカートに載せられて登場した。四角くて、大きいそれの中心に置かれたチョコレートのプレートには『つばきくん　おたんじょう日おめでとう』。

この日の所沢財閥跡取りのお披露目は大成功のうちに終わった。普段は厳しく、顔つきを緩めることのない父が上機嫌にワインを飲んで目元を赤く染め、楽しそうに笑っている。その笑顔を引き出したのが自分であることに、椿は恍惚とした気分になった。

しかしその幸せは、それからたった三年で幕を閉じた。

「どうしてこんな言葉も覚えられないんだ！」

激昂する父に、家庭教師が頭を下げる。

「旦那様！　申し訳ございません！　私が至らぬばかりに」

「君のせいではない」父が椿を睨めつける。「こいつが！　だめなんだ！」

父の言うとおり、椿は頭が悪かった。教えられたことの半分も覚えられない。どんなに頑張っても、ほとんどが頭から抜け落ちてしまう。

「申し訳ありません……お父様……」

「申し訳ございません、だろう！」

ダン！　と机が叩かれた。反動で鉛筆が床に転がる。思わず伸ばした椿の手を、父の革靴が蹴りあげた。

「痛っ！」

「何度言えばわかる？　所沢の跡取りたるもの床に落ちたものを拾ってはならない！」

椿の生まれた家は日本でも三本の指に入る歴史ある財閥だった。家族は両親と椿の三人だけだったが、その何倍もの使用人が屋敷でともに生活をしていた。しかし、椿の味方は誰一人としていなかった。

（どうして僕が生まれてしまったんだろう……）

椿が生まれる前に流産で一人、亡くなっていると使用人が話しているのを聞いたことがあった。もしその子が生まれていれば、きっと椿が生まれることはなかっただろう。そうなっていれば、母は勉強もろくにできない跡継ぎを生んだ不出来な女

として窓もない部屋に閉じ込められることはなかったはずなのに。
（お母さん……ごめんなさい……）
生活の世話も教育もほとんどが使用人によって行われた。だからいわゆる母親らしいことをしてもらったことはない。しかし、それでもたった一人の母親だった。たまに会いに行くと、あめ玉を一つ、手にのせてくれた。
「聞いてるのか、椿！」
「はいっ……申し訳ございません……！」
けれど、まだどうにかなると思っていた。父が怒るのは期待の裏返しであり、自分自身も頑張れば父の望むような子になれると思い込んでいた。
今になって、思う。そんな幻想を抱けていたあの頃は、幸せだった――。

『気持ち悪い。出て行け！』
父親の声が体にこびりついて離れない。もう五年だ。五年間、毎日頭の中に響いている。その度に芥（あくた）は頭を鉄パイプで殴られたような衝撃に襲われ、口の中に広がる苦味に顔をしかめる。
――吐きそうだ。
「考え事ですか」
あっと我に返ったときには、背後で鞭が空を切る音が聞こえていた。高田が鞭を振り上げたのだ。次の瞬間、ペチンという遊びのような音からは想像もつかないほどの鋭い痛みが芥の尻に走る。
「ぐっ……」
思わず漏れそうになる悲鳴は下唇を噛んで耐え、激痛は拳を握って爪の食い込む痛みでやり過ごす。
「反省が見えませんね」
「申し訳ございません……」
今日の鞭は痛みの強い乗馬用。平らなチップが肉を打つ度に耐え難い激痛に襲われる。特に打たれたばかりのところに当たると、あまりの痛みに頭の中は真っ白になった。
「どんな悪いことをしたのか、言ってみなさい」
「僕は……僕は――」生まれてきては、いけなかった。「――一日に三回も、オナニーをしてしまいました」
「それで」
耳に突き刺さるような高田の声。最後まではっきりと言葉にしなければ。
「これからは一日に一回にします」
「どうして一日に三回もしてはいけないのか、わかっていますか」

質問が続く。痛みで頭が回らないのに。
芥はジンジンと熱を持ったように痛み続ける尻から意識を引き剥がし、言葉をまとめた。
「一日中オナニーばかりして浅ましいから……です」
本当はオナニーなんてしていない。あの日から、性的な行為はできなくなってしまった――。
中学を卒業してから五年。仕事はおろかアルバイトだって一度もしたことがない。外に出て、人と関わることを許されていないからだ。本当はここに来るのだって父にバレていないかヒヤヒヤしている。それでも、自分一人で罪悪感を抱え続けることはできなかった。
『仕事なんてしなくていい。お前がどこぞの男に尻を振っているなんて知られれば、うちの信用は地に落ちる』
芥が家を出されたのは、十五の誕生日を間近に控えた春だった。ゲイ動画を見ていたことが知られ、父の中にほんのわずかに残っていたらしい情は消え去った。母は同性愛者を生んだ者として座敷牢へ、芥は今後一切所沢家に関与しない、近づかないという誓約書にサインをした上でその日のうちに今のマンションに送られた。
それ以来、ペニスは一度も起っていない。たとえ、好みの男に裸を見られていようとも。
「先週も同じ理由でしつけをしたはずですが」
「申し訳……ございません……」
謝罪の言葉を口にする度、父親の顔が浮かんで吐き気が込み上げる。しかしその苦しみはなくてはならないものだ。
だって、これは罰だから――。
「こちらを向きなさい」
体を起こし、高田の正面を向いて正座をする。足の真ん中に横たわった小さなペニスに、高田の視線が降り注いだ。
「そんなにオナニーばかりするならペニスで快感を得られないようにしてしまいましょう」
尻以外に鞭を受けたことはない。急所であるそこにこの凄絶な痛み――いったいどうなってしまうのだろう。
しかしどうせ使うのなんて排尿のときだけだ。それよりも痛みが欲しい。罰を与えてほしい。痛みに耐えているときだけは、何も考えずにいられるから。
「真っ赤に腫れ上がれば、こすりたいなんて思わなくなるでしょう」
「……はい」
後ろ手をついて体を支え、足を開いてペニスをさらす。細身のスリーピースを着た高田が、ペチンペチンと手のひらでチップを鳴らしながら狙いを定めるような目でそこを見下ろした。

この店に通うようになって三か月。ただ与えられたマンションの中で独り静かに過ごすだけの生活では、罰を受ける理由が他に見当たらなかったのだ。だからしてもいないオナニーをたくさんしたと言って、週に三回、お仕置きをしてもらっていた。本当はオナニーなんて誰に禁止されているわけでもないけれど、父を完全に失望させた理由を咎められていたかった。

「僕を……いいこにしてください」

そして、愛されたい――。

そんなもの、どれほど望んだって、どれほど罰を与えられたってもらえることはないとわかりながら、それでも懇願せずにはいられなかった。

エントランスを出て、この店にしか接続していない路地裏を進む。正面に細く見える大通りには、たくさんの車が現れては一瞬で消えていく。

現実だ。

いつも、思う。店の中にいる間だけは逃避していられるけれど一歩外に出れば、嫌でも現実が待ち受けている。どんなに謝罪の言葉を口にし、何度鞭を受けようと芥が芥であることは変わらない。

重い体を引きずりながら帰路に着く。一歩踏み出すごとに骨まで響くような鞭の痛みがよみがえるが、痛みを与えてもらえることは幸福だ。自分に触れてくれる人がいる。たとえそれが仕事であっても、目を合わせ、言葉を交わしてくれる人がいる――。

自宅に着いて玄関に入ると、涙がこぼれた。いつもそうだ。鞭を受けたあとは高田が相手をしてくれた喜びと、申し訳なさと、そして、安堵が込み上げてくるのだ。まだあと少しだけ、この世にいることを許されたような、そんな気がして。

（ああ……）

膝から力が抜け、三和土に尻をつく。痛みに呻いたが、次々あふれ出てくる涙を拭っているとそれも次第に気にならなくなった。

＊　＊　＊

「子どもが欲しい」

悠里（ゆうり）がそう言ったのは一年前のことだ。

斉藤久志（さいとうひさし）はセックス直後の気だるい体を起こし、膝を抱えて小さくなる悠里を抱きしめた。

「子作りしようか」

「え……」

どうやら、悠里は違う返事が来るものと思っていたらしい。自分達はゲイカップルで、少なくとも今の日本では子どもを持つことは叶わない。しかし、そうとわか

っていてもこみ上げる気持ちをこらえきれないという思いは痛いほどよくわかった。
「悠里は男の子と女の子、どっちが欲しい？」
「……男の子」
ぽつり、呟かれた小さな声。しかしこの耳は、愛しい声はどんな声量でもきちんと拾う。
「悠里に似たら女の子みたいにかわいい男の子が生まれるね」
「ひーくん……」
「同僚が言ってたんだけど、産み分けの方法ってのがあって、男の子が欲しい場合は、母体は感じてはいけないらしいよ」
「――どういうこと？」
少しずつ、悠里の緊張がほぐれてくる。子どもがほしい――その言葉を発するのに、どれほど勇気がいることか。人によっては、別れの言葉と受け取るだろう。もしかしたら悠里も斉藤がそう受け取ると思っていたのかもしれない。
「酸性とかアルカリ性とか、なんかそんな感じの。だから悠里も月に一回、感じない子作りをしよう」
交際十年、同棲八年。これだけ一緒に過ごしても、週に三回はセックスをしないと不安になる。
「感じない子作り……」
「うん」答えながら、柔らかな頬に唇をこすりつける。「悠里はすぐ感じちゃうけど……男の子ができるように頑張って我慢しようね」
――そうして始まった子作り。毎月二十日、悠里は斉藤が仕事から帰ってくる前に一人でアナルの洗浄をし、感じてしまわないよう自分でそこにペニスを模したディルドを入れて慣らしておく。その日は給料日なので同僚たちはどこか浮き足立っているが、斉藤だけは悠里が子作りの準備をしている姿を思い浮かべては勃起をこらえながら過ごしていた。本当は欲望のままペニスを突き立て、悠里の弱いところを刺激したい。まるで赤ん坊が泣くような声と顔で喘ぐ悠里をさらにぐちゃぐちゃにしてしまいたい。
けれどその日だけは静かな、それでいて普段の何十倍もいやらしいセックスをする。
「ただいま」
「おかえりなさい」
少し頬が赤いのはこれからの行為に期待しているからなのか。当然子どもができるわけはないと悠里自身もわかっているが、それでもこれはフウフの時間だ。
「準備は？」
本当は準備もしてやりたい。しかし悠里は感じやすすぎた。だからその分、子作りでないセックスをするときはこれでもかというほど甘やかすことに決めている。

「できてる……」
さらに赤くなった頬を撫で、洗面所で手洗いとうがいを済ませる。棚からフェイスタオルを一枚取り、洗面器に冷水とともに入れて寝室に向かう。
「お待たせ」
悠里はすでに裸になり、ベッドの中で待っていた。
返事はないが、少しだけ緊張しているように見えた。何も意味をなさない行為。そうとわかりながら叶わぬ夢のための時間を過ごす。思いは同じだと、伝えるために。
「お尻を見せて」
布団の盛り上がりを撫でながら言うと、悠里は布団から出て四つん這いになり、斉藤に尻を向けた。頬をシーツにこすり付け、恥じらいながらも玩具を咥えたアナルをさらしている。尻を割って真っ赤なそこを覗くと、その下、堅くなったペニスからカウパーが垂れようとしているのが目に入った。人差し指でそれを掬い、ペニスの先端にこすり付ける。
「ぁっ……」
「女の子ができちゃうよ」
「や……」
もし本当に子どもができるのなら、男女の別なんてわがままは言わないだろう。そういう性格じゃないのだ。それにこれは、悠里にとってもプレイの一つ。男の子を作るためという理由付けで、感じないセックスをされる――精液を吐き出されるためのごみ箱になるというような被虐的な思考。
「悠里、これを」
洗面器につけておいたタオルを絞り、悠里に渡す。自ら勃起を戒めるためにそこにあてる様子を見ると、一気にペニスが充血するのを感じた。
「でき、た……」
「おちんちん小さくなった？」

〜〜〜〜

＊　＊　＊

「お仕置きを……してください……」
今日の理由も「オナニーを三回したから」。昨日、朝から晩までペニスをこすり続けたことにした。
「一日に一度という約束でしたね」
「はい」
申し訳ございません――その言葉の中には複雑な思いがあった。両親への詫び。

そして掘った土を埋めるような無意味な労働をさせ続けている高田への詫び。
「……芥さん」
「はい」
高田が床に膝をついた。いったいどうしたのだろう。トップ調教師という肩書きを持つ男が、プレイ中に視線の高さを合わせるなんて。
「服を着てください」
「え？」
「服を」
「でも――」
今日はまだ一度も鞭を受けていないのに――もう、嫌になったということか。そりゃそうだよな、と内心で自嘲する。どんなに鞭を振るおうと、懺悔の内容はいつもオナニー。いい加減にしろと言いたくなるのは当然のことだ。仕事とはいえ、むしろよく三か月も我慢してくれたものだ。
「――はい」
脱いだばかりの服に手を伸ばす。その間、高田の視線を全身に浴び続けた。身支度を整え、我慢を続けてくれていた高田に頭を下げる。
「お世話になりました」
もう二度と会うことはないだろう。それでも芥が高田を忘れることは決してない。優しい人だった。プレイが終わると「お尻を冷やしましょう」と、芥がどんなにそんなことは不要だと言っても、高田はいつも冷やしたタオルで尻の熱を取ろうとした。すぐにぬるくなってしまうそれを氷水に浸し、何度も何度も「今日もよく頑張りましたね」と手を真っ赤にしながら芥の心を救おうとした。
「――鞭よりきついお仕置きに変更しようかと」
「え？」
「鞭では足りないでしょう？　だからそれよりももっと苦しいものにします」
視線で促され、ベッドに座る。高田も隣に腰を下ろした。
「苦しい……何ですか？」
よりひどい罰があるというのならそちらを受けたい。身を乗り出すと、高田は息苦しそうに眉根を寄せた。それを見て、慌てて身を引いて距離を取る。
「すみません……」
謝罪の言葉を口にすると、高田は表情を戻して何でもないというかのように首を振った。
「家族生活です」
「え？」
「これからはここで、家族生活を送っていただきます」
家族生活――その単語を聞いて一瞬頭が真っ白になった。あまりの動悸の強さに、胸の辺りに痛みを感じる。

「かぞ、く……？」
「そうです、家族です。疑似家族に愛されてください。うちにはエイジプレイコースというものが――」
「やっ……それ、は……」
息苦しい。歯がカチカチと鳴り始める。
「芥さん――」
「やっ！」
手を伸ばされたわけでもないのに、思わず身を引いてしまった。ハッとして、頭を下げる。
「も、申し訳ございません……」
「……芥さん。これは鞭よりつらいお仕置きです」
「ぁ……」
そうだ、それが欲しくてここに来ているのだ。でも、家族に愛されるなんて――。
両親の中に自分への愛がないことに気付いたのはいつだっただろうか。六歳――あの頃は厳しい中にも優しさがあった。頑張れば褒めてもらうことができたし、頭を撫でてもらうこともあった気がする。そうだ、あの頃は週に一度両親の部屋に会いに行くことができて、それで頭を撫でてもらうのが好きだったのだ。
でもそのあと――それよりあとのことは、あまりよく思い出すことができない。でも次第に会いに行っても笑顔を見せてもらえなくなって……原因は勉強ができないからだとわかっていたから毎日たくさん頑張って……それで……けれどその頃から部屋が地下に移されて――……。
「芥さん」
「っ、ぁ、」
すぐ目の前に、高田の顔があった。じっと目が合うと、心の内を覗き込まれているような落ち着かない気分になる。目を逸らし、シーツのしわに視線を向ける。
「芥さんのご両親は、本当のご両親ではなかったのかもしれません」
「――え？」
無意識のうちに視線を戻した。しかしもう、高田の目に見透かすような色はない。
「別に、血の繋がりがない人が親でもいいんですよ」
高田の言わんとしていることがわからなかった。けれど、芥を見る目はとても優しい。
「僕……」
「たくさん愛してくれる家族を作ってみませんか」
もしそんなものが手に入るのなら欲しいと思った。けれどそれを受け入れれば、芥は自ら両親を切り捨てたことになる――そう思った瞬間、自分はとっくに切り捨てられているじゃないかと内心で自嘲した。そもそも、両親が欲しかったのは優秀な跡継ぎだ。勉強ができない、ただの血縁者ではない。

でも、捨てられるのと捨てるのではまったく違う。
「僕……僕、は……」
家族が、ほしい――。
けれどそう望んでしまえば、これは罰ではなくなってしまう。両親を失望させ、苦しめた。社交の場で勉強の出来の話になると両親に恥ずかしい思いをさせた。しかもゲイで、そのせいで母親は座敷牢に入れられた。
（全部……僕のせい……）
何も望んではいけない。望んでいい人間ではない。愛されたいなんて、家族が欲しいなんて……たとえそれが金を払うことで成立する偽りのものだったとしても――。
「鞭がいい、です……これからはオナニーしてしまわないようにペニスに鞭を打ってください」
本当は、悪いことをした人間が自ら罰を決めるなんてあってはならないことだ。反省の色なし。けれど、欲しいものを与えられても罰にはならないから。
ズボンと下着をずらしてペニスを出し、両手を後ろ手についてそこを差し出す。しかし高田の意思は変わらなかった。
「これは私からの命令です」
「あ……」
「芥さんはどんなにお仕置きやしつけをしても言うことを聞けないので、別の方法を取ることにしました」
「……申し訳……ございません……」
もう見捨てられたということか。人生で二度目――いや、母親を含めれば三度目か。座敷牢に入れられることが決まる前、母親はまるで汚物を見るような目で芥を見た。でも、すべて芥の自業自得だ。
高田の目を見て頷く。
「……わかりました」
こんなことなら罰の理由付けをもっと考えておくんだった。今になって思えば何でもよかったのに。例えば歯ブラシをせずに寝てしまったとか、洗い物を一時間も放置したとか――それでも、あの暗い地下室で過ごす中での唯一の救いだったオナニーを罰せられることが必要だったのだ。やっぱり、他の理由ではだめだった。
服を直し、頭を下げる。
「今までお世話になりました」
「何をおっしゃってるんですか」
そう言う高田の表情に驚きはなく、まるで芥が最後の挨拶をするとわかっていたようだった。
「え？」
「新しいお仕置きだと言ったでしょう。これからも私が担当であることは変わりま

せんよ」
「でも……」
コースを変えることになるのだろう。それに新しい家族と言ったのだから、担当は高田ではなくなるはずだ。
「鞭を受けるのとは比較にならないほど苦しいと思います。でもちゃんと芥さんはいい子になれます」
「いい子になんて……」
そもそもなろうとしていない。どんなに頑張ったところでなれるものではないし、万が一いい子だなんて判断されてしまったら罰を与えてもらえなくなってしまう。それにこうして生きているだけで新たな罪を重ねている。
「まずは、嘘をつかないようになることを目標にしましょう」
「……え」
「気付いていないとでも思ったんですか」
「や……え？」
「本当はオナニーなんてしていないでしょう？　この子はまた嘘をついて……と思いながら鞭を振っていました。してもいないことに罰を与えることはできませんから」
「……すみません」
それならそうと言ってくれたらよかったのに。それでも今こうして明かすのは、これから徐々にフェードアウトしていくつもりでいるからだろうか。
（でも別に……）
悲しくなんてない。傷つく必要なんてない。だってみんな絶対に離れていく。大切な跡取りとして育ててもらっても、最初からいなかったもののようにされてしまう。
「――とにかくこれは私が決めたお仕置きですから。だから担当は私のままで、コースの変更もありません。ただエイジプレイのコースからスタッフに出張してもらうだけです」
「……わかりました」
家族なんていらない。欲しいけれど、欲しいからこそ望んではいけない。
胸が痛い。苦しい。
偽りの家族からの、偽りの愛情。想像するだけでこんなに苦しいのだから、本番になれば今の何倍も苦しいだろう。
（……さすがだ）
鞭なんかより、よほど効く。
「まずはどんなふうにされるのか見てみましょうか」
高田がベッドを下りた。今日は最初からこの提案をするつもりでいたのか、簡単な操作でテレビから映像が流れ始める。どうしたものかと思っていると、高田はす

ぐにベッドに戻り、なぜか芥の背後に腰を下ろした。
「抱っこで見ましょう」
「え」
腹に回された太い腕。ぐいと引き寄せられたと思ったときには、背中に高田の存在を感じていた。
「や、あの……」
「始まりますよ」
そう言われても、意識が背中に集中している。見ないといけないとわかっていても、いいようのない胸の高鳴りが激しく心臓を揺らして息苦しい。けれどここから抜け出したいとは思わなかった。人生で記憶にある限り初めての抱っこ。喉が乾くほどの緊張を覚えるけれど、もう少しだけここにいたい。
（高田さんからしてきたんだから……いいよね……？）
これくらいなら、神様も許してくれるだろうか。それとも自分は、また一つ罪を重ねたのだろうか。
「芥さん、ほら」
「あ……」
意識をテレビ画面に向けると、若い男がこちらに向かって満面の笑みを見せていた。
『僕たちのかわいい赤ちゃんです』
カメラが動き、男の横にあった柵付きのベッドの中を映す。
『かわいい……』
そこにいたのは青年だった。水色の柔らかそうな肌着の上によだれかけをつけ、むき出しの足の付け根にはクリーム色のオムツがあてられた格好で眠っている。
『ママ、そろそろおっぱいじゃない？』
低い男の声が聞こえた。どうやら撮影者が発言したようだ。ママと呼ばれた若い男が腕時計を見て焦ったように柵を下ろし、青年の横に寝転がる。
『たーくん。遅くなってごめんね』
若い男が胸元のボタンを外すと、まるで女性のようなぷっくりしたピンク色の乳首が露わになった。眠る青年の口元まであと十五センチ。ゆっくり乳首が近づいていく。なんだかとても卑猥だった。しかしまだ青年は眠っている。もしかして眠った青年の唇に膨らんだ乳頭をこすり付けて吸わせるのだろうか――そんなことを想像した瞬間、青年がパクリと口を開けた。目は閉じたままなのに、まるで意識があるかのように男の乳首に向けてパクパクと口の開閉を繰り返す。
『ほら、たーくん』
男が腕を青年の頭の下に差し入れ抱き寄せる。すると青年は安心したのか、口元に用意された乳首をパクリと咥えると、もきゅもきゅと口を動かした。
『ン……』

色っぽい男の声。けれどその表情に性感はない。まるで本物の赤ん坊をいつくしむような目で青年を見下ろし、優しく頭を撫でている。しかし、すぐにその視線がカメラを向いた。

『――あ、パパ。おっぱい中は撮らないでよ』

『大事な授乳シーンだよ。いつか卒乳したら見られなくなるから』

『そうだけど……恥ずかしい』男の頬が赤く染まる。

『ママ、かわいい』

『もう……それよりパパ、たーくんのオムツ、濡れてない？』

カメラがわずかに下を向いた。

『あ、おしっこ出てる』低い声が答える。

『もー！　きれいきれいしてあげて』

カメラがガタガタと揺れながらベッドに置かれた。今度は眠る青年の腰骨付近が映し出される。

『たーくん、ごめんね。おちんちんキレイキレイしようね』

ゴツゴツした男性の手が映った。顔は見えない。しかし声から世話を楽しんでいることが伝わってくる。

大人用のオムツが開かれると、わずかにペニスが映り込んでいることに気がついた。恥ずかしいところを撮られているというのに青年は身動き一つしない。本当に眠っているのだろうか。

『うんちは？　出てる？』

『出てないよ』

『ちょっと便秘気味かな』

『綿棒しておこうか』

太い指が横に置かれていたらしい綿棒を一本取り出した。ローションかオイルか……何かの液体をつけてから青年の膝を立たせる。その間に男の腕が入った。どうやら綿棒をアナルに差し込んでいるらしい。どんなふうにしているのか見たい。気になる。しかし置かれたままのカメラではその様子を見ることができない。

『どう？』授乳を続ける男が問う。

『お尻からすぐのところにうんちはなさそう』

『でも刺激しておけばあとで出るかも。水分が足りてなかったかな』

『オムツを替えたらミルクを作るよ』

『お願い。ふふ。たーくんおっぱい上手』

オムツが閉じられたところで動画は終わっていた。たった三分か五分の短いものだ。でも、強烈な印象を芥に残した。

（こんな世界が……あるんだ……）

〜〜〜〜

＊　＊　＊

目の前に水色の産着を着た青年がいる。想像していたよりも幼い顔立ちの子だ。お尻周りはオムツのせいかふっくらとしていて柔らかそうに見える。

オムツなんて赤ん坊や介護のためのものであるという認識は変わらないのに、自分でも驚くほど違和感を覚えなかった。

大学時代の友人である高田から電話を受けたのは、悠里と子作りを始めて一年が経った頃だった。昼休みに折り返しかけると電話で話すようなことではないと言われ、その日の夜に個室の居酒屋で顔を合わせた。

「十五年ぶりだな」

適当な数字を言うと、高田は冷たい視線を斉藤に投げた。

「お前は計算もできないのか」

「わかってるって。十一年ぶりだろ」

「記憶力も悪いな。三年前にこうして飲んだだろう」

「お前が忘れてないか測っただけだよ」

遠慮なく相手をこき下ろす言葉をぶつけ合うのは学生時代から続く高田との挨拶がわりだった。運ばれてきたビールジョッキを掲げ、カチンとぶつける。

「お疲れ」

お互いの近況を話し、上司の愚痴を言い合いながらつまみの到着を待つ。串揚げセット、枝豆、膝軟骨の唐揚げ、アボカドサラダにもやしのナムル。たぶんこれは、悠里が作った方がうまいな、なんてことを考えながら菜っ葉のカラシ和えをつまむ。すべてが揃うと、高田が切り出した。

「恋人は？」

高田は斉藤がゲイであることを知っていた。そして斉藤も高田がゲイであることを知っている。

「前回会ったときと変わってないよ。悠里。覚えてるだろ？　そのまま続いてる」

お前は？　と言いながら箸をサラダに伸ばしたとき、高田が言葉を差し込んだ。

「子どもが欲しくないか」

つまんだアボカドが切れてポロリと落ちた。

「――悠里は男だぞ」

「知ってる」

「法律が変わるのか?!」

一筋の光が見えたような気がした。しかしそれはほんの一瞬の稲光のようなものだった。

「違う」

「……そうか。だよな」

知らず前のめりになっていた体を戻し、椅子に背をもたれさせる。しかしそういう冗談を言う男ではなかったことを思い出し居住まいを正した。
「それで？」
「実はさっきの上司の愚痴は前の職場のものだ」
「転職したのか」
別に今時珍しくもない。むしろ新卒から定年まで一つの職場に勤める人間がこのご時世にいったいどれほどいるのだろう。
「五年前にな。今は――まあ、簡単に言うと風俗にいる」
「風俗？　お前が？」
堅物のくせに。高学歴のくせに。ゲイのくせに。ドＳのくせに。
「ああ」
「……ボーイ？」
「キャスト……っていうよりプレイヤーか」
「お前が接客？」
「ああ」
真顔のまま、高田がビールをあおる。
「愛想よくなんてできんのか」
「する必要がない」
「どんな店？」
斉藤が知っている風俗とは何かが違いそうだ。もしかして民俗学とかそういう系の風俗だろうか。性風俗ではなくて。
「基本的には客の要望には何でも答えるが、店のメインはＳＭとエイジプレイだな。俺はＳＭだが」
（性風俗かよ……）
まあ、ＳＭなら理解はできる――が。
「お前、昔彼氏のちんこだめにしてなかった？」
「言い方が悪い。もういらないと言われたから使えなくしただけだ」
「一緒だろ……」
「俺からそうしたいと言ったわけじゃない」
高田が店員呼び出しボタンを押したので口をつぐむ。高田がビールを二つ頼むのを待ち、店員の姿が消えるのを確認してから尋ねる。
「で、ご主人様をやってるわけか」
「ご主人様……とは少し違うな。仕事だから、どちらかと言えば客がご主人様だ」
「けどお前がＳだろ？」
「もちろん。Ｍの客に奉仕している、という意味では少し違うけどな」
今日はやけに饒舌だった。いつもは自分のことはほとんど話さず人の話ばかり引き出し、ばかにして楽しむくせに。

「ふうん……で？　急に電話よこしたんだから何かあったんだろ」
「ああ……」
神妙な顔つきになった。仕事関係の相談だろうか。しかし客の話はできないだろうし――もしかして同僚に好きな人ができたとか？　しかし、片思いを相談してくるような殊勝さはこの男にはない。
「バイトしないか、うちで」
「バイト？」
「そう」
「人手が足りないのか」
恋人がいると返事をしたばかりだ。まさか内緒で働けなんてことは言わないだろうが。
「まあ……いや、人数は十分いるんだが、相性があるだろ」
「ああ……まあ」
言わんとしていることはわかった。きっと今いるスタッフに合わない客がいるのだろう。
「恋人……悠里くんと一緒に働いてほしい」
「え？　一緒に？」
まさか複数プレイ――と眉根を寄せると、斉藤の内心を読んだらしい高田が露骨に嫌そうな表情を作った。
「エイジプレイをしてほしいんだ」
「……悠里の？」
「違う。うちはゲイカップルのプレイヤーが赤ん坊役の客の世話をするんだ」
「家族……みたいな？」
高田が頷くのを見て、複雑な気持ちになった。
家族。今でこそ悠里と家族になったが、それは悠里にも斉藤にも、重い言葉だった。
同性愛者は――特にゲイは、家族に受け入れてもらえないことが多い。
悠里は大学入学の際に親にゲイであることをカミングアウトして、受け入れられないまま一人暮らしを始め、その後も没交渉が続いている。斉藤自身はカミングアウトしたわけではなかったが、テレビで同性愛者が話題に上がる度に否定的な言葉を発する家族を見て、自ら家を出て、それから連絡も取っていなかった。
だから家族がいないとか捨てられたとか、そういう話を聞くとまるで自分の痛みのように感じられる。
きっと高田の働く店に来る客も同じようなものなのだろう。性行為ではなく世話を求める。しかもゲイカップルに。きっとその家族は、誰にも否定されない幸せな家庭になる。
「給料は高額だし……でもまあ、特殊だから。それに相性次第では仕事に繋がらな

い……ってこともあるんだが、もしよかったら考えてみてくれないか」
「ああ……」
一応頷いたものの、前向きに考えていたわけではなかった。子どもは欲しいが、それは悠里との子どもで、赤ん坊からという意味だった。金は……まあ、あるに越したことはないが悠里は無駄遣いをしないし、やりくりもうまい。年に一回、二人で旅行に行く程度の贅沢しかできないけれど将来のための貯金はしているし、一緒にいられればそれで幸せなので不満はなかった。
しかし帰宅後、話を聞いた悠里はおずおずと、けれど正面から斉藤の目を見て「働いてみたい」と言った。

〜〜〜〜

「哺乳瓶を用意しました」
「え……」
「初めては親の方がいいというのならコップにしますが」
「あ……いえ」
こだわりなんてない。でも少しだけ高田にも甘えてみたかった。
「ミルクではなくお茶ですが」
「いただきます……」
緊張する。ドキドキする。でも、いざ哺乳瓶を前にすると不安が勝った。今一緒にいるのは高田なのに、頭の中には「悠里」と「ひーくん」がいる。
（来てくれなかったらどうしよう……）
来てくれたとしても、仕事だからいやいや来ているだけだったら――でも仕事なんてそんなものかもしれない。みんな生きていくためにしているだけだ。
気持ちが悪い。胃の辺りがぐるぐるしている。自分で自分の思考が制御できない。会いたいのか、会いたくないのか。赤ん坊になりたいのか、なりたくないのか。家族がほしいのか、ほしくないのか――ほしくない、と思う。だって、どうせいなくなる。捨てられる。それなら最初からいない方がいい。
――でも、あの二人に挟まれながら乳首を吸う時間は幸せだった。言いようのない温かいものが胸を満たす感覚があった。でも幸せだったから、このまま思い出として大切にとっておきたいという気持ちもあった。このまま二度とあの二人に会わなければ、ふわふわで真っ白なままの思い出になる。
「芥さん？」
「ぁ……」
口を開け、哺乳瓶の乳首を咥えなければ。けれどそれをしたら、このままエイジプレイを続けていくことを受け入れることになってしまう。
「――やっぱりコップにしましょう」

「あ」
高田は芥の言葉も待たずにベッドを下りてしまった。失敗した。口の中にすっぱいものが広がる。きちんとしないといけなかったのに。人の好意を無駄にしてはいけなかったのに。
「もう、し……わけ……」
声が震えた。本当は床に下りて額をこすりつけなければならない。なのに体はおろか、口もろくに動かない。
「私のためなんですよ」
戻ってきた高田が朗らかな声で言った。手間をかけさせてしまったのになぜ――そんな気持ちで見上げると、苦笑された。
「実は斉藤は私の学生時代からの友人なんです。彼は気に入った相手をとことん愛しぬくタイプで、嫉妬深いんですよ」
「はあ……」
親しそうだなとは思っていたけれど、まさか友達だったとは。気の合う同僚くらいかと思っていた。しかし、それにしてもいったいなぜそんな話を始めたのだろうか。
「悠里くんのこともとても大切にしていて、彼の幸せが斉藤の幸せみたいなところがあって」
高田は何か思い出しているのか、時折懐かしそうに眼を細めながら話を続けた。
「だから、芥さんの初めてを私が奪ったと知られたら厄介なことになりそうなんです」
「え……？」
「彼は悠里くんのことはもちろん、芥さんのことも家族だと思ってるんですよ」
「え……え？」
「しかも、生まれたての赤ん坊。かわいいかわいい芥さんの初めてを悠里くんではなく私に取られる……斉藤がどう反応するか、想像するだけでちょっと厄介ですね」
「ぁ……」
その言葉は明らかに芥への気遣いだったけれど、表情にはすべてが嘘ではないのかもしれないと思わせるリアルさがあった。
「そういうわけなので、今回はコップでお願いします。芥さんが二人からミルクを飲ませてもらって無事に哺乳瓶デビューができたら、そのあとで私の手からも飲んでくださいね」
「高田さん……」
優しい人であることは知っていた。けれど高田はもともとSの調教師だ。いつまでもこうやって専門外のことをさせるのは申し訳なかった。
「……あの」
「はい」

頭を下げてコップを受け取り、一気に飲み干す。礼を言ってコップを渡し、Tシャツをばさりと脱いだ。
「芥さん？」
「哺乳瓶ですぐに飲めなかったから……罰を与えてください」
ズボンと下着を一息に下ろし、床に四つん這いになって頭を下げる。別に、高田の仕事のことだけを気にしたわけではない。好意を無下にしてしまった罪悪感と、気を遣わせた罪悪感、それに、鞭を受ければ不安と緊張がほぐれるような気がしたのだ。
「……芥さん」
頭上から降ってくる声には、困惑が含まれていた。
「お願いします」
自分が楽になりたいがための懇願。自分勝手で、高田の気持ちなんてそっちのけの横暴な要求。
「……芥さん、芥さんは罰を受けるようなことはしていないでしょう」
「いえ……」
理由を説明しようとして、やめた。自分がいかに身勝手な人間かを知られたくなかったし、何より言えば高田の気遣いをまた無駄にさせてしまうと気付いたから。
「……斉藤さん……？　たちが僕にミルクを与えたいって思ってくれてるのに気付かず、僕は高田さんから哺乳瓶で飲ませてもらいたいって思ったから……」
だから、と体の向きを変えて尻を向ける。苦手な陰嚢打ちをされてもいいと伝えるために足を肩幅に開いてぐっと尻を上げ、陰嚢をさらす。
「……わかりました。でも鞭は使いません」
「え……」
罰を与えてはもらえない、ということだろうか。また、失敗してしまったのだろうか。
「芥さんは今、子どもに戻っている途中ですからね。大人に使う鞭ではなく、お尻を叩いてしつけましょう」
「ぁ……や、だめ……」
それでは高田が手を痛めてしまう。そんなことは望んでいない。
「だめ？」
「ぁ……」
冷徹な声に、高田のスイッチが入っていたことを悟った。
「だめ、って言いました？」
「あ……や、……申し訳――」
高田が床に正座をした。タンタンと手のひらで太ももを叩く。
「ここに」
「……はい」

こんなのは本意ではない。高田の負担になんてなりたくないのに。
「何のお仕置きを受けるかわかっていますか」
「……はい。罰を与えてもらう側なのに、だめなんてわがままを言って罰を選ぼうとしたからです」
「はい。それに、あんなに無防備に陰嚢を揺らして……あんなこと、してはいけませんよ」
「……はい」
申し訳ございませんでした、と言うと、温かい手が尻に触れた。
「あまり時間がありません。しっかり叩くので、少ない回数で反省してください」
「はいっ……」
自分で望んでおきながら、この瞬間はとても怖い。勝手に尻に力が入り、肛門が引き締まる。
パシッ！
鞭のように空気を切る音もなく、痛みと衝撃が突然やってきた。今まで感じたことのない種類の痛み。鞭のように狭い範囲ではなく、広く尻の全体が熱を持つ。
「ああっ……！」
「まだ反省できていませんね」
「はいっ……」
もっと、もっと叩いてほしい。高田の手が心配ではあるけれど、鞭よりももっと、幸福な痛みに感じられる。
パシッ！

〜〜〜〜

普段なら、玄関のカギを開ける音でエプロン姿のかわいい恋人が飛び出してくる。しかし今日は、部屋の中が静かなまま。
（いないのか？）
しかし、買い物などで家を出るときはたとえ斉藤の仕事中であっても『今から買い物に行ってきます』『ただいま』と入っているのに。
もしかしたら体調が悪いのかもしれない。走り出しそうになるのをこらえて静かにリビングダイニングに入ると、真剣な顔で鉛筆を握る姿があった。
「うーん……」
「ただいま」
「あっ！　ごめん」
慌てた顔もかわいい。何をしていたのだろうと紙を覗き込むと、名前がいくつも書かれ、その半分は二重線で消されていた。
「名づけか」

「うん……いろいろ考えちゃって」
芥。その名前はもう使わないことに先日決めた。前回のプレイのあと高田から連絡がきて、名前を考えてほしいと言われたのだ。芥は使わないかもしれないけれど、一度考えてみてほしいと。
「あ、ごめん。すぐご飯の支度するね。手洗いうがいしてきて」
「ああ、ありがとう」
洗面所に入ると、すでに着替えが置かれていた。名づけに集中するため、先に準備しておいてくれたのだろう。部屋着に着替え、ダイニングに戻る。ドアを開けた瞬間、煮物のいい香りがした。
「肉じゃが？」
「あ、肉じゃががよかった？」
「いや、匂いで」
「ああ、似てる……かな？　カレイの煮つけなんだけど」
悠里は料理上手だ。付き合いたての頃はそれほど得意だったわけではなかったようだが、同棲を始めて家に入ると、家事炊事は自分の仕事だからと言ってたくさん勉強してくれた。だから、部屋に魚臭さは微塵もない。これなら芥の――あの子の離乳食もスムーズにいきそうだなんてことを考えてしまう。
そんな自分の思考に苦笑しながら席に着くと、皿を並べ始めた悠里が笑った。
「あの子のこと考えてるでしょ」
「そりゃあ……まあ。ちゃんと飯食ってるかな」
「高田さんが食べさせてくれたらいいんだけどね……」
悠里の表情がくもる。
あの二人の関係性については、少しだけれど高田から説明を受けていた。ＳＭをすることで芥は安心を得ていて、心のよりどころは「罰」である。しかしもう見ていられないから、エイジプレイに移行することに決めた、と。けれど、それだけだ。普段の生活については高田もまったく知らないと言っていた。そこまで踏み込むことはできないとも。
「難しいよな。高田は俺らと違って仕事って感覚なんだし」
「まあそうだけどさ……でもあんなにかわいいんだから、高田さんだって――」
「高田だって？」
「まあ、僕たちとは違うからさ、そういう意味でも……その、ムラムラしたりしないのかな」
「飯の前に食欲がなくなるようなこと言うなよ……」
なんで飯の話からあいつの欲求の話になるんだ。顔を歪めると、悠里が笑った。その笑顔に笑いを返し、手を合わせて「いただきます」。煮崩れのない完璧なカレイの煮つけと、だし巻き卵にほうれん草と油揚げのお浸し。味噌汁はわかめと豆腐。
「ん、うまい」

早く芥にも食べさせてやりたい。
「ありがとう。……あのね、名前なんだけど」
「うん」
早く決めたい。一緒に決めるつもりで名づけの本も買ったけれど、仕事中は読めないのでどうしても悠里に任せ気味になってしまっていた。しかし次に会うときまでには決めておきたい。大切だからこそ慎重に考えたいが、我が子をいつまでもごみ扱いするわけにはいかない。しかし、あと二日しかない。
「僕の悠とひーくんの志を取って悠志（ゆうし）か、僕の里とひーくんの久で里久（りく）……って思ったんだけど」
「ああ、いいんじゃないか。その二つなら里久の方がいいな」
「どうして？」
「悠志と悠里だと音も似てるからさ」
「ああ、そっか。僕はゆーくんって呼ぼうかなと思ってたけど、ひーくんは呼び捨てだもんね」
「まあ、悠里のことはママって呼ぶからいいっちゃいいけど」
「え……」
悠里の顔が赤く染まった。嫌がるかもと思ったが、まんざらでもないどころか照れている。
「もちろん、……あー……あの子がいないときは悠里って呼ぶよ」
「や……もう……」
照れた顔がかわいい。早く「ママ」と「悠里」を使い分けてかわいがりたい。
「悠里はどっちがいいと思ってた？」
「どっちも捨てがたいなって」
悠里が水を飲み干した。パタパタと顔を手であおぐ。
「じゃあ里久がいい」
「斉藤里久……うん、いいよね」
「ああ、いい感じだな」

〜〜〜〜

一時間くらい走っただろうか。布袋を被せられたまま腕を引かれ、転びそうな恐怖の中、石や枝の転がる地面の上を歩いた。ドアの開く音。軽くきしむ床。どうやら木でできた建物らしい。室温の変化、進んだ先でまたドアの音。そこでようやく手首の拘束が外され、視界が開けた。想像したとおり木造の建物で、どこかの別荘らしくテーブルやソファベッドが置かれていた。しかし見渡してもテレビやパソコン、電話のような外部と繋がりを持てそうなものは一つもない。
「では」

男は結局名乗りもせず静かに部屋を出て行った。最後にガチャンという大きな施錠の音だけを残して。

（どうしよう……）

悠里は無事だろうか。さすがに他人には手を出さないはずだけれど確証はない。いや、でもきっと大丈夫……今はそう願うしかない。もし悠里に何かあったら、申し訳が立たない。しかし、一人のときに連れて来られたわけではなくてよかった。高田たちに逃げたと思われなくて済む――無意識にそう考えた自分が嫌になった。悠里の無事もわからないというのに、保身ばかりだ。

室内にはカビのにおいが充満していた。家具にもほこりが積もっているので、ずっと使っていなかった建物に違いない。締め切られたままのカーテンを開き、窓を開ける。窓の外側には頑丈な縦格子が取り付けられていた。

（何なんだここ……）

窓の外には鬱蒼と生い茂った森があった。目をこらしても、明かりの一つも見えやしない。車のスピードが落ちて高速から下りたらしいとわかったあと、上り坂が続いていたので山の中だろうとは思ったが……。他の窓も開けてみるが、どの方角を見ても外の景色は変わらなかった。それにやはり、縦格子がはめられている。明らかに人を閉じ込めるための作り。それとも外には獣がいて、中の人を守るためにあるのだろうか。

風の通り道を作り、カビ臭さを逃す。そうしながら少しでも快適にしようとしている自分に驚いた。斉藤や悠里に会うまでだったらきっとこんなことはしなかっただろう。カビ臭いくらいがお似合いだ、このまま体を侵食されて死んでいければいいとまで思ったことだろう。

（やっぱりだめか……）

男が出て行ったドアには外から鍵がかけられていた。ドアの下にも開けるような場所はない。つまり差し入れも望めないということだ。きっとここで芥が死ぬのを待ち、死んだらそのあとで火をつけて終わりにするということだろう。

「最後に会いたかったな」

頭の中に高田と斉藤が浮かぶ。それに悠里だって最後の表情は笑顔ではなかった。またあの家で、四人でご飯を食べたい。斉藤の腕の中で口を開け、咀嚼し、飲み込む。そうしながら三人がしゃべるのを聞いて眠くなったらウトウトして、悠里のおっぱいを吸いながら――できれば誰か他にも一緒に寝てほしい。それでまた頭を撫でてほしい。

幸せだった時間を思い出しながらカビ臭いベッドに寝転がり、体を丸める。

（大丈夫……）

頭の中には大切な思い出がたくさんある。ただ寂しいだけで死んでいくわけじゃない。嫌な記憶に上書きされず、むしろ幸せな思い出だけに包まれて死んでいくのだ。きっとこんな幸せなことは他にない。

目を閉じると勝手に口がパクパクと動いた。悠里の乳首が吸いたい。斉藤にオムツを替えてほしい。

（そういえば、ママとパパって呼んだことなかったな……）

きっと呼んだら二人は驚き、そして喜んでくれただろう。

「ママ……パパ……高田さん……」

呟くように呼んだだけで、目尻から涙がぽとりと落ちた。

13万3千字超です。
最後は明るくハッピーです！
よろしくお願いいたします！

家族を買った日―サンプル―

gooneone（ぐーわんわん）

2022/3/15

メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11
ちるちる:gooneone